

国際連語論学会第二回大会のお知らせ

日時：2014年2月8日（土）、9日（日）

会場：大東文化会館ホール（JR池袋駅より東武東上線東武練馬駅下車、徒歩4分）

参加費：500円（会員、非会員共通）

連語論研究大会（2月8日〔土〕）

- 受付（9：00～）総合司会 石井 宏明（東海大学）
開会の辞 高橋 弥守彦（大東文化大学）9：30～9：40
- ※研究発表
1. 中国語の“把”構文における“把”の「客体」について9：40～10：15
小路口 ゆみ（大東文化大学院生）
2. 現代中国語における時相の「量化」現象10：15～10：50
青木 萌（神奈川大学大学院生）以上司会 神野 智久（湖南大学）
- お茶タイム（20分間）10：50～11：10
3. 存在義を表す連語のむすびつきについて—働きかけを意味する動詞を用いる場合—
11：10～11：45
洪 安瀾（大東文化大学院生）
4. 「空間的な位置変化のむすびつき」の判断基準に関する一考察11：45～12：20
佐々木 俊雄（北京大学院生）以上司会 安本 真弓（高千穂大学）
- 昼食（60分間、近くにレストランがたくさんあります）12：20～13：20
- シンポジウム（テーマ：連合論研究の現在と未来）13：20～15：20
鈴木 泰（専修大学）・彭 広陸（北京大学）・白 愛仙（明星大学）
以上司会 王 学群（東洋大学）
- お茶タイム（20分間）15：20～15：40
5. 日本語における後置詞の文法化について15：40～16：15
劉 洪岩（九州大学院生）
6. 「場合」節に関する記述的研究16：15～16：50
陸玉蕾（北京大学院生）
7. 文法化の視点からみる終助詞の承接——「よね」「かね」などを例に
16：50～17：25
譚 崢（北京理工大学）以上司会 小高 愛（千葉大学）
- 総会17：25～17：50
- 閉会の辞 高木 一彦（大東文化大学名誉教授）17：50～18：00

※大会閉会后、茶話会（k-403、約1時間）が顧問の先生方を囲んであります。どなたでも参加（無料）できます。

※年間会費は一般2000円、院生1000円、大会会場で当日受付いたします。顧問は無料。

国際連語論学会第二回大会のお知らせ

連語論研究大会（2月9日〔日〕）

受付（9：00～） 総合司会 上地 宏一（大東文化大学）
開会の辞 鈴木 泰（専修大学） 9：30～9：40

※研究発表

1. 日中対照から見る中国語の所有物受身文と持ち主受身文の再考 9：40～10：15
劉 爾瑟（大東文化大学院生）
2. 日中対照研究から見る因果関係を表す日本語の接続助詞「タメ（二）」の用法について
—「タメ（二）」と“因为/所以”“由于”の対応関係を中心に— 10：15～10：50
劉 会禎（北京外国語大学院生）

以上司会 石井 宏明（東海大学）

お茶タイム（20分間） 10：50～11：10

3. 連語の構造について—「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」
を例に— 神野 智久（湖南大学） 11：10～11：45
4. 中国語の「施事主語」と「施事賓語」 11：45～12：20
王 慶（九州外国語学院）

以上司会 王 学群（東洋大学）

昼食（60分間、近くにレストランがたくさんあります） 12：20～13：20

特別講演（テーマ：連語論研究の歩み） 13：20～14：20
鈴木康之（大東文化大学名誉教授）

以上司会 白 愛仙（明星大学）

お茶タイム（20分間） 14：20～14：40

5. 日中対照関係から見る中国語3類の受身表現について 14：40～15：15
高橋 弥守彦（大東文化大学）
6. 形式語研究から見た接続辞体系の試み—機能的分類の試案について—
15：15～15：50
田中 寛（大東文化大学）
7. 「Vナガラノと名詞とのくみあわせ」について 15：50～16：25
彭 広陸（北京大学）

以上司会 山口 直人（大東文化大学）

閉会の辞 続三義（東洋大学） 16：25～16：35

※大会閉会后、顧問の先生方を囲んで、茶話会（k-302、約1時間）があります。参加費は無料です。奮ってご参加ください。

※年間会費は一般2000円、院生1000円です。大会当日受け付けます。

※顧問は年間会費、大会参加費ともに無料です。

国際連語論学会第二回大会発表要旨

2月8日（土曜日）

研究発表1 小路口 ゆみ（大東文化大学院生）

テーマ：中国語の“把”構文における“把”の「客体」について

“把”構文“名词1+把+名词2+动词+其他成分”中の「処置のむすびつき」「把+名词2+动词+其他成分」は“把”の客体を処置するということであり、以下の例文(1)のように、“把”の客体は、一般に特定の名詞だと見なされている。

- (1)她把双臂浸泡在消毒酒精水桶里。 (语料库《人到中年》)
それから両腕をすっぽりアルコール液にひたした。 『中年に到るや』
- (2)把她放在床上，替她盖上被子。 (语料库《人到中年》)
ベッドに寝かせ、布団のはしを押さえてやった。
- (3)我把我的心留在你身边，留在我亲爱的祖国。 (语料库《人到中年》)
私の心はあなたの傍に、愛する祖国に置いていきます。
- (4)没有把秦波的刁难，视为难以忍受的凌辱。 (语料库《人到中年》)
副部長夫人の嫌がらせも我慢のならない侮辱だとは見ていなかった。
- (5)要把谈话认真地进行下去。 (语料库《人到中年》)
身を乗り出し、本腰で話し始めた。

考察した結果、上掲の例文に見られるように、“把”の客体は代詞(例 2)、名詞連語(例 3, 4)、動詞(例 5)になる場合もある。なぜこれが可能かについては高橋 (2013) の枠組み理論による。高橋の枠組み理論を応用すれば、“把”の客体は名詞のほか、動詞や形容詞もそれが可能である。連語でもそれが可能であり、高橋は名詞を核とする名詞連語が客体になる場合を基本名詞連語と言ひ、そのほかは派生名詞連語と言っている。

研究発表2 青木 萌（神奈川大学大学院生）

テーマ：現代中国語における時相の「量化」現象

本発表は龚千炎(1995)が時相(phase)の特徴に基づいて分類した四つの「状況タイプ」(“状態情状”、“活動情状”、“终结情状”、“实现情状”)に該当する文に対して考察を行い、時相は、補語、量詞、状況語、或いは動詞に内在する意味特徴が述語動詞を「量化」することによって成立していることを証明した。

例えば、爸爸最近写了三篇论文。(お父さんは最近論文を三本書いた。)(龚千炎 1995:20)という文における時相は“写”と“三篇”によって成立する。つまりこの文の状況タイプは「有限持続タイプ」(“终结情状”)であると考えられる。というのは、論理的な観点からいうと、持続動詞の“写”は、概念上、際限なく[持続]の意味特徴を保持する動詞であるが、“写论文”に“三篇”という数量詞が加わると、“写”の[持続]が必ず[終息]することになる。即ち“写论文”が“三篇”に到った時点をひと纏まりの出来事(event)として捉え、“写”の[持続]が「量化」されるのである。

また本発表では、朱德熙(1982:185-186)が挙げた六種類の“把”構文においても時相が存在し、述語動詞が「量化」されていることを証明した。

研究発表3 洪 安瀾 (大東文化大学院生)

テーマ：存在義を表す連語のむすびつき—働きかけを意味する動詞を用いる場合—

日中両言語は「存在」についての定義が随分と異なっている。日本語では一般的に例1、2のような、述部が「に格の場所名詞」と「いる(ある)」のような存在を意味する動詞と組み合わせるむすびつきにより作る文は存在文と言う。

- (1) 夏江と次子は台所にいるらしく、徹は茶の間のソファに腹パイになっていた。(高橋 2009)
江夏和次子好像在厨房，徹则在吃饱了肚子倒在客厅的沙发上。(笔者译)
- (2) カラコルム山脈と言いましてね。ヒマラヤの奥地にあるんです。(あした来る人)
叫喀喇昆仑山脉。位于喜马拉雅山腹地。(情系明天)

中国語の場合、例1、2の訳文のように、存在を意味する動詞(在、位于)を使う場合があれば、人間のはたらきかけを意味する意味する動詞を使って、結果的に存在を意味する場合もある。

- (3) 大门上挂着一块木牌。(李临定 1993 : P330)
正門に一枚の木の札がかかっています。(同上)
- (4) 黑板上写着你的名字。(同上)
黑板にあなたの名前が書かれています。(同上)

例3、4は人間の「はたらきかけ」を意味する連語(挂木板、写名字)が文中の述部として、客語の位置に受事のノモ名詞を用い、主語の位置に場所名詞がくる分である。典型的な中国語の存在文と見なしている。

処置の結果として、受事がある場所に存在するので、文は客語の「存在」を表す。例3、4のような訳文は「存在構文」(于康 2006)と呼ばれる。本稿は日中料言語の中、人間のはたらきかけを意味する動詞連語を使って、存在の意味を表す場合を検討する。

研究発表4 佐々木 俊雄 (北京大学院生)

テーマ：「空間的な位置変化のむすびつき」の判断基準に関する一考察

現在までの連語論研究の成果に基づき、鈴木康之(2011)では従来の「空間的な移りのむすびつき」という名称を「空間的な位置変化のむすびつき」に変更している。この「空間的な位置変化のむすびつき」は、有情物主体による一方の地点からもう一方の地点への移り動きを表現するもので、普遍的な空間認知において出発点と到着点が存在することが前提となるが、それらのうちのどちらか片方あるいは両方共が言語化されないことが少なくなく、動作の目的や1つまたは複数の經由点といった要素がくみあわさることもある。「空間的な移動のむすびつき」や「到着のむすびつき」と混同しやすいという問題点が存在することも事実であるため、当該のむすびつきにおけるくみあわせに関する分析を通してその特徴を明らかにすると共に、他のむすびつきとの区別を明確にする必要があるものと考えられる。

本発表は、現代日本語を分析対象とし、有情物主体の有意志動作においてどのようなくみあわせであれば到着点を伴った位置変化が起こったと判断されるのかということについて一定の指針を示すことが目的である。

研究発表5 劉 洪岩（九州大学院生）

テーマ：日本語における後置詞の文法化について

日本語における後置詞は「によって」、「をもって」、「に対して」のような接続助詞的・格助詞的な機能のものとされる（鈴木 1972, 高橋・松本・鈴木など 1998）。後置詞の認定と特徴の考察について「その品詞におさまるものか、そのわくからでて、すでに後置詞化したものか」というダイナミックな視点で把握するのは一般的である（鈴木 1972 : p502）。

「後置詞化」の形成は一種の文法化の過程なのか（Matsumoto 1998, 日野 2001）、文法構造の借用なのか（大坪 1965, 陳 2005）についてまだ検討する余地がある。本研究は通時的な考察を行い、日本語における後置詞化の過程は一種の文法化だと提案したい。

本研究は主に中古と中世の資料を調査し、後置詞の成立と変化の文法化の特徴を考察したい。考察の重点は①後置詞の連用的な用法と連体的な用法の成立の動機づけ、②「ヲ」、「ニ」などの格助詞との複合と歴史的な原因、③従属節の再分析による後置詞の形態の合弁、④連語としての後置詞の接続助詞的な機能と格助詞的な機能の成立などの面とする。

結論として、日本語における後置詞は文法化によって成立した複合構造である。この文法化のプロセスに格助詞の希薄化と動詞、名詞の意味の漂白化が同時に発生していた。再分析によって、後置詞は形態上一語化する。この変化の動機づけは古代中国語の前置詞の影響によって日本語における後置詞が成立し、そして一般動詞へ類推することになった。

主要参考文献

- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
高橋太郎・松本泰丈・鈴木泰・金子尚一・金田章宏・須田淳一 1998 『日本語の文法』（私家版）
大坪併治 1965 「にして」と「において」 『島根大学論集 人文科学』14
日野資成 2001 『形式語の研究—文法化の理論と応用』九州大学出版会
陳君慧 2005 「文法化と借用—日本語における動詞の中止形を含んだ後置詞を例に」『日本語の研究』1
(3)

研究発表6 陸玉蕾（北京大学院生）

テーマ：「場合」節に関する記述的研究

「場合」は現代日本語における使用頻度の高い名詞として、以下のようなプロトタイプの用法があるといわれている。

1. オフィリヤの事も、わしは最悪の場合を覚悟していたのです。 （太宰治『新ハムレット』）
2. もちろん、二人とも救われた場合、問題はない。 （小泉八雲『東の国より』）

『新明解国語辞典（第七版）』により、(1)は抽象名詞として、「その物が置かれている、その時々の特
殊な事情。ケース」の意味を示し、(2)は文法的意味で、「何かの事情でそうなった（しなければならない）
時」を表し、接続助詞の用法に認められているという。その一方、『新選国語辞典（第九版）』を調べてみる
と、(2)は「事にであったとき」の意味で、「おり」などの名詞と取り替えられることがわかる。そして、『岩
波国語辞典（第七版）』には、(2)のような用法は「概して、時（4）と同様に使う。法令文で、『場合』
と『とき』とを重ねて用いるときは、前提とする条件の大きい方に『場合』を使うのが慣用」などの解釈

が付いている。つまり、現代日本語における「場合」は「状況、ケース」に対応する意味を表すほか、接続助詞のような文法的用法もあり、「おり・時」の時間名詞に取り替えることもできるという。

森岡(1988)は「形式名詞は自立する詞の形式を持ちながら辞の機能すなわち付属的機能を取得したもの」と述べたが、(2)はこの形式名詞の定義に沿っていると言える。それでは、現代日本語における「場合」は抽象名詞と形式名詞との二つの用法を持っていることがお互いにどのような影響をもたらしたのか、そして普通の条件節との違いは何なのかを、本稿で明らかにしたいものである。

研究発表7 譚 嶢 (北京理工大学)

テーマ：文法化の視点からみる終助詞の承接——「よね」「かね」などを例に

「文法化」は内容語から機能語への変化に見られるだけでなく、機能語のみの範囲内においても見られる(例えば「からには」「とは」「について」など)。現代日本語の終助詞承接形は結合方式によって承接形の意味機能が形成・変化するというのもその一つの例である。本発表では日本語における終助詞承接形の意味機能の形成・変化を動的に考察したうえで、文法化レベルを基準に常用の7つの承接形¹を体系的に把握することによって、それらは文法化過程の異なる段階にあることを明らかにすることを目的とする。

1 7つの終助詞承接形における結合関係と意味変化

研究対象とする7つの終助詞承接形の分析結果は、構成要素の結合関係と意味変化の対応は以下のようになる。

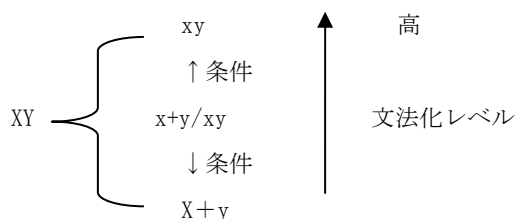
「+α意味」による三分類

A 融合型	「かな」	「意味拡張」が生じる
B 過渡型	「よね」、「よな」、「かね」	条件づきで「意味拡張」が生じる
C 加算型	「かよ」、「わよ」、「わね」	「意味拡張」が生じない

2 文法化過程における終助詞承接形の把握

文法化の視点からみれば、終助詞の承接形は動的な体系を成している。この体系は「意味拡張」が生じているかどうかを基準に分類した「加算型」「過渡型」「融合型」といった3つのタイプからなっている。そして、この3つのタイプは文法化のレベルが「低」から「高」へ、という段階差を呈している。「過渡型」が一定の条件の下に、「加算型」になったり、「融合型」になったりして動的に変化する性質を持つとみなせる。

終助詞承接形(XY)の文法化レベル



¹ 「かな」「かね」「かよ」「わよ」「わね」「よね」「よな」という7つの終助詞承接形である。

国際連語論学会第二回大会発表要旨

2月9日（日曜日）

研究発表1 劉 爾瑟（大東文化大学院生）

テーマ：日中対照から見る中国語の所有物受身文と持ち主受身文の再考

中国語において単語レベルで動詞の形としてのヴォイスは存在しないが、文レベルで表せる主述文、“被字句”と“把字句”などがある。ここで、まず以下の例文を見てみよう。

(1) 小偷偷了他的钱包。（“主谓句”）

スリは彼の財布をすった。

(2) 他的钱包被小偷偷了。（“被字句”）

彼の財布はスリにすられた。

(3) 他被小偷偷了钱包。（“被字句”）

彼はスリに財布をすられた。

例文(1)～(3)は、同じ出来事を表しているが、視点の当て方によって、異なる構造で表すことができる。例文(1)の文構造をまとめると、「NP₁+VP+NP₂+“的”+NP₃」となり、例文(2)は「NP₂+“的”+NP₃+“被”+NP₁+VP」で、例文(3)は「NP₂+“被”+NP₁+VP+NP₃」とまとめられる。そのなかで、NP₂は持ち主で、NP₃はその所有物である。本稿では、例文(2)のような“被字句”を「所有物受身文」と呼び、例文(3)のような“被字句”を「持ち主受身文」と呼ぶこととした。所有物受身文と持ち主受身文は一般的に言い換えられるが、互換しにくい場合も少なくはない。本稿では、所有物受身文と持ち主受身文の互換条件を解明すると同時に、用いられる言語環境も検討したいと思う。

研究発表2 劉 会禎（北京外国語大学）

テーマ：日中対照研究から見る因果関係を表す日本語の接続助詞「タメ（二）」の用法について — 「タメ（二）」と“因为/所以”“由于”の対応関係を中心に —

因果関係を表す日本語の接続助詞「タメ（二）」の研究は主に「カラ」「ノデ」との使い分けを中心に行われてきた。中国語の“因为/所以”“由于”の使い分けに関する研究も、文法的機能の違いから、両者の関係について研究なされた。実際の調査から見れば、中国語の“由于”が用いられる文と因果関係を表す「タメ（二）」が用いられる文と対応する例文が一番多く、他にも「タメ（二）」と“因为/所以”と対応する例文も多く見られる。本稿は日本語の「タメ（二）」と中国語の“因为/所以”“由于”を研究対象とし、その対応関係を明らかにした上で、日中対照研究の角度から因果関係を表す「タメ（二）」の文法機能を更に明らかにする。「タメ（二）」は因果表現を表す時、「必然性」の因果表現から「偶然性」の因果表現まで、また確実的な因果表現から推論的因果関係までを表すことができ、一定的な連続性が現れる。具体的に言えば、原因と結果との必然性が高い場合では中国語の“由于”と対応し、一方、必然性が低い場合所謂「偶然性」の因果関係では“因为/所以”と対応する傾向がある。また、話者の推論が強く含まれば含まれるほど、「タメ（二）」は“因为/所以”とより対応する傾向がある。

研究発表3 神野 智久（湖南大学）

テーマ：連語の構造について — 「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」

を例に一

連語論で注視すべき問題として、「連語」という言語単位の構造的な性質についてである奥田連語論、鈴木連語論には一貫して、そこまではっきりとは記述されていないが、「連語による意味の添加」という理論が打ち出されている。それは例えば、「卵をフライパンにわる」「卵を皿にわる」のように、本来、もようがえ動詞である「わる」が、先にあげた例の中では「とりつけ的な意味が付加される」というように、連語論では理論を展開している。このことについては、『ことばの研究・序説』では、「その変化のし方はすべてがひとしいというわけではなく、さまざまな段階、形態、あるいは程度がありうるだろう」とし、奥田連語論の段階では、そこまではっきりと明示されているわけではない、ということがわかる。そこで本稿では、この構造的な性質としての連語について、「連語による意味の付加」というのが、どのような範囲で適応可能なのかを検討する。

研究発表 4 王 慶 (九州外国語学院)

テーマ：中国語の「施事主語」と「施事賓語」

(1a,b)の対立からわかるように、「吃」という動作動詞には、有生性の人間、動物が動作主、いわゆる「施事主語」になる必要があると言われている。

(1) a. 人 吃 肉。

人は肉を食べる。

b. *肉 吃 人。

ところが、Chao (1968)以来、(2b)のように、いわゆる主語位置に「两磅肉」という食物が現れ、「十个人」が「施事賓語」となるという「主賓互換」現象も観察されている。

(2) a. 十 个 人 吃 两 磅 肉 。 [Chao (1968): p.72]

Ten people eat two pounds of meat.

b. 两 磅 肉 吃 十 个 人。

Two pounds of meat eats,- feeds, ten people.

(3) a. 四 个 人 坐 一 条 板 凳 。 [Chao (1968): p.72]

Four people sit on one bench.

b. 一 条 板 凳 坐 四 个 人。

One bench seats four people.

同様の観察が李敏 (1998) でもなされている。

(4) a. 三 个 人 呆 一 间 屋 子 。 [李敏 (1998) : p. 54]

三人が一軒の部屋にいる。

b. 一 间 屋 子 呆 三 个 人。

一軒の部屋に三人がいる。

(5) a. 两 个 人 睡 一 张 床 。 [李敏 (1998) : p.54]

二人が一つのベッドに寝る。

b. 一 张 床 睡 两 个 人。

一つのベッドに二人が寝る。

本発表は、中国語の語順、および主語、目的語の互換性問題に取り組むものである。

研究発表5 高橋 弥守彦 (大東文化大学)

テーマ：日中対照関係から見る中国語3類の受身表現について

日本語の受身文は、受け手を主体とし、動詞の受動態 [～レル/ラレル] を用い、文中に「受身のむすびつき」(受身義を表す意味構造「仕手の影響を受ける行為や感情など」)を有する文を言う。一方、中国語の受身表現は、文中に「受身のむすびつき」(受身義を表すひとかたまり)のある下記に挙げる三類の組立構造で表す“被字句”(例1)・意味上の受身表現(例2)・語彙上の受身表現(例3)で作る“被动句”を言う。

- (1) 私は電車の中で財布をすられた。(刘振泉 p.351)
我在电车中被偷走了钱包。(同上)
- (2) イネがたくさん吹き倒された。(興水優・島田亜美 p.100)
稻子刮倒了不少。(同上)
- (3) この計画は(みんなに)喜ばれている。(刘振泉 p.359)
这项计划受到(大家)欢迎。(同上)

受身義を表す日中両言語を対照すると、両言語の間に異同のあることが分かる。本稿では、このうちの日本語の受身文が中国語の受身表現で訳される場合、なぜ“被字句”・意味上の受身表現・語彙上の受身表現のうちの 하나가選ばれるのかについての理由を検討する。

研究発表6 田中 寛 (大東文化大学)

テーマ：形式語研究から見た接続辞体系の試み—機能的分類の試案について—

形式語、または複合辞の研究は長い蓄積があり、個別の意味と機能については多くの記述がなされてきたが、接続成分、文末成分ともに体系的な記述はまだ不十分である。本発表では田中(2010、2014)をうけ、接続辞の体系化を試みる一方で、形態論的立場から格関係と接続成分の関係を明らかにすることを目的とする。具体的には「とたんに」「はずみに」「やさきに」などの「に」格の接続成分への参画、さらに「影響で」「かどで」「はずみで」などの「で」格の接続成分、また、「あまり」「結果」のように格助詞を伴わないゼロ格接続成分について、その内実を明らかにする。さらに、個別の事例として「中」をとりあげ、様々な成分の生起について、実例分析を行う。形式語の記述研究では、その規則性についてこれまで明確な視点に欠けるところがあった。本研究ではこれまでの文型研究にも言及し、あるべき用例・用法の集成をめぐり、問題点のいくつかを明らかにしていきたい。

研究発表7 彭 広陸 (北京大学)

テーマ：「Vナガラノと名詞とのくみあわせ」について

「Vながら」は動詞の同時形として機能しているが、それがノ格の形をとって連体格のカザリとしてカザラレ名詞と組み合わせることもある。例えば、次のようなものである。

○時計を見ながらの訴訟話・炬燵にあたりながらの気象学の話・微笑を見せながらの挨拶・食事をしながらの私たちの会談・寝ころびながらの相談・ノートを見ながらの読経・口ごもりながらの提案・アメリカで働きながらの勉強・避難しながらの危い運搬・逃げながらの横投げ・温度の調節をはかりながらの仕事・昔をしのびながらの旅興行・笑いながらの言葉・歩きながらの沈黙・生れながらの器用さ・生きながらの地獄

このような「Vながらの+N」という組み合わせにはどのような結びつきのタイプが見られるのか、実例に基づきながらそれを考察することが本発表の目的である。